
同じ空の下

柚真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ空の下

【著者名】

柚真

【Zコード】

Z6247A

【あらすじ】

彼氏に突然告げられた別れ話。彼の夢のためならしようがないかもしれないけど…

私、藍野千砂には彼氏がいた。
アイノ チサ

富士野湊。 成績も良く運動神経もいい私の自慢の彼氏だ。
フジノミナト

今日は湊と付き合つて1年の記念日だった。そんな日に私は衝撃的な言葉を湊から聞かされた。

湊と約束をして私達は学校帰りに『テート』をしていた。

映画を見てお茶をして楽しく会話をしていた。

そして帰り道、近くの公園に寄つた。

「今日は楽しかったね。またあのお店に行こうね！」

湊はなぜか元気がなくうつむいていた。

「湊……？ どうかしたの？」

湊は急に改まって私のまつをじっと見た。そしてどんなでもないこととを口にしたのだった。

「あのさ… 千砂。俺と別れて欲しいんだ。」

「……え？」

つこわづきまで映画を見てお茶をして楽しく話して

それなのになんでいきなりそんなことを言って出したのか私にはわからなかつた。

田の前が真っ暗になり言葉が出てこなかつた。

「別に干砂がいけないとかそういうじやないんだ。俺・北海道に行くんだ。」

「北海道…？」

「うふ。親が転勤になつて北海道に行へことになつたんだ。」

湊の親は転勤が多くこの町にも3年ほど前に引っ越してきたのだった。

「湊もう高校生だよ？一人暮らしとか…」

「俺が星について勉強してるの知ってるよな？北海道は星の勉強をするのに一番いいところなんだ。」

湊は将来星関係の仕事につきたいとよく言つていた。それほど星がすきなのだ。

「でつでも北海道に行くからってわかることないよね？」

私の田から涙がこぼれてきた。

湊は静かに首を横に振った。

「千砂にはじっちはじでの生活があるし俺にはあつひでの生活がある。遠距離だと千砂も嫌な思いをたくさんすると思う。だから俺たちは別れた方がいいんだ。」

そういうつて湊は私の涙をふいた。

「千砂は笑つていてよ。もう俺のことは忘れてくれていいからな。」

「そんな…」

湊はじっと私を見ていた。これはもう決めたからひとつ合図なのだ。

今まで湊は一度決めたことは絶対に曲げたりしなかった。

もうつ湊が決めてしまったんならしょうがない。そう自分に言い聞かせた。

湊の邪魔をしたくなかったからだ。

「出発は明日なんだ。家族はみんな先週出発してるんだけど俺だけ明日にしてもらつたんだ。今日はたいせつな日だから。」

そういうつて湊は私に持つていた紙袋を渡した。

「あしたは学校だから見送りはいよ。…元気でな千砂。」

そういうつて湊は家に帰つていった。

そして次の日、湊が北海道へ出発する日。

私は布団から出る」とが出来ず学校も休んでしまった。

やつこえぱと思ひ昨日湊にもらつたプレゼントを開けてみた。

すると中にはきれいな星のネックレスとメッセージカードが入つて
いた。

【ずっと笑つていってくれよな。そして俺なんかよりいい彼氏を見つ
けるんだぞ。】

そのカードを見た瞬間私の目からボロボロと涙があふれてきた。

湊の夢は邪魔したくないでも…湊のことは好き、離れたくない！

そして私は布団からがばつと起き上がりと仕度をして家を飛び出した。

自転車を思いつきついで近くの駅に着いた。ホームにはもう電車
が来ていた。

電車の中を探すと湊の顔が見えた。

「湊つー！」

湊はびっくりした様子で電車の窓を開けた。

「湊の馬鹿！湊よりいい彼氏なんているわけないじゃん。私は湊がいいの。本当は別れたくない…。」

「千砂…。」

千砂の目からは涙がこぼれていた。

「『めんな。離れ離れになるくらいなら別れた方が千砂のためだつてずっと言い聞かせてた。でも違ったんだな。いくらはなれていたつて今は電話もあるしメールも出来る。俺千砂の気持ち考えてるつもりでもまったく考えてなかつた。』

「ううん。」

千砂は首を横にふった。

「私も毎日電話する。メールもする。手紙も書く。だから湊も私のこと忘れないでね。」

湊はクスッと笑つて私の涙をふいた。

「忘れるわけがないだろ。」

そういうと電車が走り始めた。つられて私も走り始めた。

「いいか千砂、俺たちは決して離れ離れになつたりはしない。だって同じ空の下にいるんだからな。」

「うんー。」

「千砂元氣でー。ついたら電話するからな。」

そうこうと電車はホームを出て向いの方へ消えていったしまった。

私は涙をふいてにこっと笑った。

寂しくなんかない。だって同じ空の下にいるんだから。

(後書き)

なんかちょっと展開が早すぎるのかも知れないです
一応初投稿作品です！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6247a/>

同じ空の下

2010年10月9日23時17分発行